

『おねーさんの耳はロボの耳』 完結編第五話

著作 a s h

この作品は『To Heart』（リーフ・ビジュアルノベルシリーズVOL.3）を元としています。

13・フルパワ―

セリオと来栖川老人の二人が案内されたのは、どこかの豪邸の客間：ゲストルームとも言うべき豪華な部屋で、専用のバス・トイレを兼ね備えた広い部屋だった。

「しばらくの間はここで暮らしてもらう。必要なことは、あなたの可愛いメイドロボにでも頼むんだな」

セリオの目を壊した男が笑いながら言う。だが、来栖川老人はそれには何も答えない。

そんな反応は男の期待したものではなかったが、それを気にする様子もなく二人を部屋に入れた後、

「じゃあな」

と短く告げて部屋のドアをゆっくりと閉めて、鍵を掛けた。

こうして、部屋には来栖川老人とセリオの二人だけが残された。

「セリオ…大丈夫か？」

心配そうに尋ねる来栖川老人。

だが、セリオの反応は何もない。

「聞こえなくなっただけじゃなからうに？」

さらに続けると、おもむろにセリオが来栖川老人の手を取って、手のひらに指をすべらして、何かを書き出した。

“わたしは大丈夫”

と一文字ずつ手のひらに書いていくと、来栖川老人もそれをちゃんと読み取ったらしく、納得した表情を見せた。そして、小声でセリオに尋ねる。

「一体どうして、こんな真似を？」

“まだ近くにいる”

「そうか…。それにしても、お前さん本当に大丈夫なのか？」

小声でなおも心配そうに尋ねる来栖川老人に、セリオは笑顔を見せて答えた。だが、その笑顔には涙のあとが残っている。

「しかし……」

そう言いながら、来栖川老人がそつとセリオの顔に手を当てた。男に潰されて開くことのない目から流れ出た涙のあとをなぞりながら、

「つらかったらうに、痛かったらうに……」

とつぶやく。

正確にはセリオやマルチでさえ、痛覚と言うものはない。外皮に対する接触とその圧力により、それを危険と判断するかしないかの程度である。もちろんそれは来栖川老人も承知のことだったのだが、その時はただ優しくセリオの頬を撫で続けた。そして、セリオもされるままだった。

その頃、浩之たちは夕食もすでに食べ終えて、居間でのんびりとしていたがセリオが言っていた一時間が過ぎようとしていた。

「ぼちぼちセリオが言っていた約束の時間なんだけどな…」

と浩之がおもむろに立ち上がり、玄関の方を気に掛けている。だが、外に車が止まる様子もなければ、玄関に人が来た気配もない。

「そんなに正確に来るかどうかは分かりませんよ、藤田さん」

山本がかすかに笑いながら言うが、浩之はかりかマルチまでもが、

「でも、セリオおねーさんは約束破ったことありませんから…」

と言って、玄関の方に行ったり来たりを繰り返す。

そんな二人の様子を見かねて、山本は苦笑しながら提案をした。

「それなら、私が留守番していますから、ちよつと外の様子を見てきたらどうです？ 藤田さんも、マルチも気になってしょうがないんでしょう？」

それを聞くと浩之は、

「そうですか！ それじゃ、マルチ行くぜ！」

と即答して、マルチの手を取って玄関に直行して、すぐ外へ出ていった。

「やれやれ…」

開けっ放しの玄関のドアを見て、そんなつぶやきをもらす山本だったが、その時にはすっかりセリオの制御端末のことなど頭になかった。もし、この時に自分が繋いだPCの画面を見ていたなら、セリオの身に何らかの事故があったことを知り得たのだが。もっとも、早く知ったところで何かが出来ると言うものでもない上に、セリオの事件については

遅からず知ることになるのだ。

嬉々として山本を留守番に残してきた浩之とマルチはまず家の前に出てみた。二人して、辺りを見回してみる。

「いないなあ…」

「いませんね」

「よし、それじゃこっちの角を見てみよう。あそこなら、別の方から来ても、すぐに分かるしな」

気をすぐに取り直して、少し先の角まで行って道路の先に目を凝らしてみる。

「どうだ、マルチ？」

「おねーさんらしき人は見えません」

「そうか…」

「それじゃ、今度はあっちだ！」

さらに別の角まで行って、同じように見回してみる。

「…やっぱりいません」

「それじゃあ、も一度こっち！」

先ほど見た角の方に戻って、もう一度。だが、マルチの表情は暗くなるばかりだ。

「…ごめんなさい、やっぱり見えませ〜ん」

「そ、そうか…。それじゃ、もう一度向こうに…」

と何度となく別の角まで行っては、よく見回してみたが、やはり結果は同じだった。

浩之もマルチもここまで繰り返しているのは、大きな不安を感じていたせいもある。そ

れが一体何なのかまでは二人ともはつきりとは分かっていなかったが、何となく口に出すことも出来なかった。口に出してしまえば、それが本当のことになってしまいそうな気がしたから。

「…今度はどうだ？ マルチ…」

「……………」

「マルチ？」

「…ぐすっ……やっぱり、見えませ〜ん」

「おいおい、泣くなってば。別にマルチが悪いわけじゃないんだから」

「…で、でもっ……うわああああん」

ついに泣き出してしまったマルチを、浩之は抱き止めてなだめようとする。

「大丈夫だって。たまたま今回は遅れてるだけさ、きつと」

「…でもっ…今までおねーさんが時間を守らなかったことって……ありませんよ…。一体どうしちゃったんでしょうか……」

「そ、それはそうだけど、きつと相手のわがままに付き合ってるんだらうぜ」

マルチに言いながら、それは自分自身にも言い聞かせてるのだ。そんなことを思いながら、浩之はそつと身体を動かしながら、

「とりあえずこうしていてもしょうがないから、一旦家に戻らうぜ。もしかしたら、俺達が外に出てるのを知って、こっそりと帰ったりするかも知れないじゃないか」

「…そうでしょうか？」

「ああ、きつとそうさ。それで、きつと今ごろ俺達を脅かす準備をしてるに違いないぜ」

「そうですね、きつと！」

ようやくマルチの表情も晴れてきたが、浩之自身は今自分が言ったことに対して、まるで根拠がなく、ただ藁をも掴む気持ちで一杯だった。ただ、どちらにしても、これ以上外で捜しても意味がないだろうと感じていた。

こうして浩之たちが家に戻った時、浩之のかすかな望みも叶えられなかった。

「あれ？ セリオは一緒じゃないんですか？」

二人を迎えた山本の言葉と表情に、すべての望みは絶たれた。

「念のために聞くけど、俺達が出てる間にもセリオはここには来てないんですね？」

それでも、あきらめ切れない浩之が山本に質問したが、山本は一瞬怪訝そうな表情をしたが、すぐにこくりと頷いた。

「…それじゃ、セリオおねーさんは一体……」

マルチがまた泣きそうな表情を見せたが、今度はやはり浩之にそれを止める余裕はなく、玄関に立ったままうつつむいでしまう。

その時だった。

「あっ！」

とだけ短く叫ぶと、山本が突然思い立ったように、二階に駆け上がった。

「あれ？ 山本さん？」

とそれをそのまま見送った浩之だったが、すぐに山本の行動の意味が分かり自分もそれに続こうとした。が、不意に引つ張られる感覚があった。

「そ、そうか！ セリオの端末ですね！ ……つと、あれ？」

「どうやらマルチが泣きながら、浩之の服を掴んでいるらしい。浩之はマルチの方に向きを直して告げる。」

「おい、マルチ！ 泣いてる場合じゃないんだ。セリオの居場所が分かるんだよ！」

「…え？…そうなんですか…！」

「と、きよとんとした表情のマルチの返事を待たずに、マルチを抱き上げるようにして、浩之も二階へと一気に駆け上がった。」

「そして、二階のセリオの部屋に浩之が入った時、そこにあったのは先ほどよりも遥かに暗い表情をした山本の姿だった。」

「や、山本さん？」

「…定時交信途絶だなんて…そんな馬鹿な…！」

「一体何があったんです？」

「半ば呆然としている山本に詰め寄ると、山本はようやくまともに返事をし始めた。」

「いえ、例の位置情報を追ってみようと思ったんですが…。ある位置からずっと交信途絶状態なんですよ」

「え？ それは？」

「位置からすると、交信不可能領域じゃないですよ。それにしても、来栖川の屋敷からここに来るには非常におかしなコースをたどってるんですよ」

「と、すると…！」

「何らかのトラブルで交信不可能になったか…！」

「トラブルって何ですか！」

「それは私も分かりませんよ。直前の状態では別におかしなところはないです。ですが、その後の定時交信が異常終了してるので…」

「だから何ですか！」

「その辺の途中までの通信ログを解析してみれば、何かが分かるかも知れません」

「それじゃ、すぐに見ましようよ」

「そうですね」

やや調子の荒くなった浩之の言葉にも、素直に応じて山本がまた作業を始めた。浩之の言葉などに構う余裕はないと言うことなのだろう。

しばらくして、山本の表情に変化があった。

「な……こ、これは……」

「何か分かったんですか？」

「……状況はよく分かりませんが、セリオのアンテナが強制的に壊されたみたいですね」

「どーゆーことなんですか？」

「さあ……。最後に緊急事態コードを送信しますから、事件に巻き込まれたようです」

「その緊急事態コードってのは？」

「その名の通りで、ある事態に遭遇した時に最優先で送信するコードです。で今回送って

きたのは……何だこれは？ ……誘拐か？」

誘拐と言う穏やかではない言葉を耳にして、浩之にもわかにかに焦りをあらわにする。

「ゆ、誘拐？ もしそうなら、警察に連絡しなきゃ！」

「待ってください。必ずしも誘拐と決まったわけじゃありませんし、メイドロボがそんな

ことを通知したからと言っても、それで事件として警察が動きはしません」

「それじゃ、どうするんです？」

「とりあえず、交信が途絶えた場所まで行ってみます。何か手がかりがあるかも知れないし、セリオのセンサーが壊されたとしても、内部センサーに切り替われば、活動には支障はないはずです。それにアンテナも内部に小さなものがありますから、近距離でなら位置を確認できますからね」

「分かりました、それじゃ早速行きましょう！」

と、山本の言葉にすぐ浩之が続けて、一緒に立ち上がろうとしたが、山本はそれを手で止めた。

「…藤田さんはここで待っていてください」

「どうしてですか！」

「たまらず山本に食って掛かる浩之だったが、山本もそれに負けずに言い返す

「気持ちばかりですが、連絡がないとは言い切れないでしょう。私も何か分かったらすぐに連絡しますから」

しばらくの間、二人はにらみ合うがごとき黙ってお互いを見つめていたが、やがて浩之がぶいっと顔を横に向けて、吐き捨てるように言った。

「…くっ！ 分かりました」

そんな浩之に山本は落ち着いた口調で告げる。

「必ず連絡しますから…」

「お願いしますよ、山本さん」

「はい、分かりました。…あ、そうだ」

一際強く頷いた後、山本の言葉の調子が大きく変わった。

「何ですか？」

それにつられて浩之がきよんとした表情を見せながら、山本に尋ねると、山本は至って真面目な顔で浩之に尋ねるのだった。

「いつまでマルチを抱えてるんですか？」

「へ！？」

山本に言われて浩之が自分の脇を見ると、そこには自分の腕に抱えられているマルチの困った顔があった。

「あの〜〜……」

「あ……」

山本の後を追って、二階に駆け上がる時にマルチを脇に抱えてからと言うもの、ずーっとそのままだったのだ。ちなみに、マルチはお腹の部分を浩之に持ち上げられている恰好の上に短いスカートなので、後ろから見れば下着は丸見えである。

「わりいわりい！」

浩之がそう言っ、慌ててマルチを降ろすと同時に、山本はアタッシュケースをしまい出して、

「それじゃ、すぐに私は出掛けます。もし、何かあったらこの電話番号に」

と小さなメモを渡す。

「ええ、それじゃ、山本さん、お願いします」

「はい。藤田さんも…」

短く言うと、山本はアタッシュケースを持って部屋から出て行き、そのまま外に止めてあった車に向かう。この時、山本が乗ってきたのは研究所所有のメンテナンス・カーである。

車に乗り込むなり、山本はおもむろに助手席側にある小さなキーボードを叩き始めた。搭載されているカーナビゲーションシステム「せつちゃん」（命名の由来は、そのナビゲーションシステムがセリオのものをそのまま利用していることから）に、詳細なルートと目的地情報をセットしているのだ。

「さて、せつちゃん。よろしく頼むよ」

『はくい、任せてちょうだい』

明るい声が山本の言葉に反応する。その声は皮肉にも、セリオの声そのものだった。

一方、来栖川老人に優しく顔を撫でられるままだったセリオもようやく動きを見せ始めた。

不意に来栖川老人の手を止めて、喋り出したのだ。

「ありがとう、おじい様。でも人間と違って、痛みはないから安心して」

「もう、いいのか？」

突然のセリオの言葉に、来栖川老人が尋ねる。もう普通に会話してもいいのかと。

それに対してセリオは笑顔で答える。もつとも、目だけは相変わらず閉じたままだったが。

「ええ。それと、おじい様にお願いがあるんだけど、いいかしら？」

「わしに出来ることなら何でも」

「このセンサーを完全に取って欲しいのよ。これがあると、どうにも出来なくてね。聴覚だけに頼らざるを得ない状態なの」

「しかし、それには確か専用の道具がいるんじゃないのか？」

「さすがによくご存知ね。でも、それはわたしが持つてるから、おじい様はわたしの言う通りにしてくればそれでいいわ」

「よし、分かった」

セリオは来栖川老人の返事を受けて、自分の手首を一度はずし、充電用端子の脇にある工具を取り出す。

「普通のメイドロボにはこんなものないから、あの連中も安心してるでしょうけどね」

クスリと笑いながら、それを来栖川老人に渡す。その後、それを使ってセリオの指示に従って、来栖川老人はセリオの外部センサー「耳飾り」を苦勞しながらも、どうにかはさすことが出来た。

「ふうう…年寄りにはちと細かすぎるのお」

奇麗にセリオの耳が見える状態になった時、来栖川老人は心底疲れたような様子を見せた。

「無理させちゃってごめんなさいね。でも、おかげで様子がよく分かるようになったわ」

「しかし、目はどうにもならんじゃろ？」

「ええ。でも、それを補うには十分な性能があるのよ、内部センサーでね」

「大したもんじゃな」

「当たり前じゃないの。さてと、それじゃ行くわよ」

「行くってどこに？」

「わたしはね、怒ってるんだから。ただでさえ、浩之さんとの約束には間に合わないし、その上こんなキズまで付けられたんだから。これ以上下らないことで時間食ってる余裕はないのよ。さっさと連中を懲らしめて、帰るのよ」

セリオの「わたし怒ってるのよ」発言を聞いて、来栖川老人はわずかに苦い表情を見せる。だが、もちろんそれは心底呆れてるからではなく、そんな感情を見せるセリオに親しみのようなものを一層強く感じているくらいだ。

「やれやれ…、とんだおてんばさんじゃな」

「おじい様は騒ぎが収まるまでここにいてもいいわよ」

「何を言う！ わしだって連中を懲らしめてやらにや気が済まん」

「でも、老骨に鞭打つ真似はよくないわよ」

「こう見えても、結構ならしたもんじゃ。だから、余計な心配は無用」

息巻いてポーズを取る来栖川老人に、セリオは困ったような笑みを浮かべながら、あきらめたように言う。

「はいはい。それじゃよろしくお願いしちゃうけど、くれぐれも無茶はしないでちよいだいね」

「おお、任せておけ！」

どんと大きく胸を叩く来栖川老人。それを分かったのか、セリオもかすかに笑う。そして、しばらくしてからセリオはその表情のままドアに近づいた。

「さて、それじゃ、まずはこのドアを壊しちゃうわよ」

と言ってセリオはドアノブを握った。ドアを外して壊すことも出来たろうが、それだと派手すぎるので、相手に警戒をされてしまうだけだ。そのため、ドアノブを無理矢理回して、鍵そのものを無効にすることにしたのだ。

「さーてと、バッテリー残量チェックOK、冷却器、各制御部、各駆動部オールグリーンと……そうだ、おじい様悪いんだけど、わたしの服の袖をまくってくれる？」

「おお、そりゃいいが、どうしてじゃ？」

ドアノブを握ったままの姿勢のセリオが、そう言うのと来栖川老人はわずかに怪訝そうな表情をしながらも、セリオに寄って袖をまくり始める。

「ちょーっと熱くなるから、少しでも冷やすようにしないとね」

「何だったら、服を脱いでもわしや構わんがな」

「いやよ。だいたい嫌いな連中に見せることはないでしょ」

「確かにそうじゃな」

来栖川老人がセリオの両袖を短くまくり終えると、セリオはドアから来栖川老人を遠くけて、しばらくそのまま動かなかった。

そして、不意に笑みを見せて、叫んだ。

「フルパワー（高出力）モード、行くわよ！」

その声とともに、豪華な作りのドアノブはあっさりと破壊され、鍵も何の意味を持たなくなっていた。こうして、セリオの反撃は開始された。

セリオはすばやく廊下に出て、周囲の様子を探る。

赤外線や超音波の近接センサーで周囲の広さや奥行き、搭載された各種センサーによって材質や音の吸収率などを算出して、あらかじめデータを用意して、適宜それを補正しながら、正確に音による位置算出が出来るようにしておく。

「いいわよ、おじい様」

見通せる範囲に人の姿がないのを確認して、セリオはまだ部屋の中にいる来栖川老人に声を掛けた。それに応じて、来栖川老人は念の為に周囲に気を配りながらセリオのいる場所まで近づく。

「どうじゃ、セリオ？ 分かるか？」

「ええ、何とかなりそうよ。それと、この位置なんだけど、おじい様のところから直線距離で五十メートルも離れてないわね」

「そうじゃろうな」

「お知り合いかしら？」

「ま、そんなもんじゃ。そんなことはいいから、先を急ごう」

何気なくセリオが口にした言葉に対して、来栖川老人は珍しく言葉を濁してしまった。そればかりか、それには触れて欲しくないとはかりに、話題を替えてしまうのだった。

その態度に何か感じたのか、あるいは本当に先を急ぐべきと思ったのか、セリオは来栖川老人に、

「そうね、急ぎましよ」

と短く答えて、廊下を歩き出した。見取り図があるわけでもないが、まずは相手に報復するよりも、来栖川老人を安全なところ、要するに非常に近い来栖川老人の邸宅まで送る

ことを考えていたのである。もちろん来栖川老人にそんなことは言っていないのだが、セリオとしては個人的な報復よりも、来栖川老人の身の安全の方が大事なことだったのだ。

セリオはどうか建物の外に出ることを考えていた。外に出れば、室内よりも有利になるはずの上、戦い方をいくらでも考え出せる。

「どうにかして外に出ないといけないわね」

そんなセリオの案に来栖川老人が反論する。

「いや、外に出ても番犬の類がいなくても限らん」

「確かにその可能性はあるわね」

「ま、せいづらがわしの言うことを聞いてくれれば、それでいいんじゃないか？」

「その望みは薄いかしら？」

「たぶんな」

来栖川老人の頼りない返事を聞いて、セリオはため息を一つついた。

「ふう……。それじゃ、おじい様を先に安全なところに連れて行くのは無理がありそうね」

「何じゃ、お前さんはそんなこと考えておったんか！」

「当然じゃないの。だって、わたしはロボ……あつ、ちょっと静かにして」

突然セリオが会話を遮った。セリオのセンサーに反応があったのだ。

セリオは来栖川老人を壁際に寄せるように手で誘導して、人が来る方に神経いやセンサーを集中していた。そして、自身も人が来ると予想される通路との角まで進み、じっとタイミングを計る。

(目標接近……：交差まであと三秒……二……一……！)

セリオの計ったタイミング通りに、男が通路に姿を見せた。

「えいっ！」

それと同時に、セリオの渾身の蹴りが男の腹に命中……するはずだったが、セリオの予測よりも男の身長が高かったらしい。

「うおっ！」

セリオのひざは見事に男の股間を直撃したのである。本来は腹を強打して、男の動きを止めるだけのつもりだったのだが、これはこれで効き目は絶大である。その地獄の苦しみを与えたセリオは屈託のない様子で、

「あら？ ちょっと位置が違ったみたいね〜」

と笑うだけだった。しかし、股間を直撃された男には何も考える余裕などなかった。ただ股間を両手で押さえて、何も言えずにうずくまっているだけだ。

「やれやれ、これはちよっと可哀想な気もするが……」

その様を見て、来栖川老人がつぶやくと、セリオが来栖川老人に尋ねてくる。

「ねえ、おじい様。この人はわたしのセンサーを折ってくれた人かしら？」

「ん？ ああ、そうだ、こいつじやな」

「なら自業自得ね。それじゃ、先に行きましょう」

センサーをへし折った男が股間直撃で自業自得なら、目を潰した男はどれくらい責めを受けるのだろうか。ふとそんなことが来栖川老人の頭をよぎったが、何となく恐いものを感じてしまう。

「男としては同情するがな……」

と、廊下にうづくまっただままの男を一瞥して、来栖川老人もその場を後にした。

しばらく進むと、不意にセリオの足が止まる。どうやら、また反応があったらしい。

「いるのか？」

来栖川老人が低く尋ねると、セリオはこくりと頷いて、

「この先の部屋に二人。声から判断すると、一人はあの男のようね」

と小さな声で答える。なお、セリオの言う「あの男」とは当然ながら、「目を潰した

男」である。

「あの男は相当ロボットに詳しいようじゃが、大丈夫か？」

「確かに詳しいわね。それにあのマイナスドライバーも普通の奴じゃなかったから、あの

男もロボットの研究か何かに関係してる可能性が高いわ」

「ここはわしが抑えることにしよう」

「駄目よ。いくらおじい様が達者でも、危ない目にさらすわけにはいかないもの」

「お前さんに守られると言うのも、何だか嬉しくないんじゃが……」

「こればかりはいくらおじい様でも駄目よ。だって、これはわたしの役目なんですから

ね」

「うーむ……。釈然としないが、まあお前さんに任せるとしようか……」

「そーそー」

なおも納得しきってはいない来栖川老人だったが、セリオの言葉に逆らいはしなかった。

「それじゃ、お前さんに任せるが、お前さんだって無茶はするなよ」

「ええ、もしもの時には、ちゃんと助けてね」

とニツコリと微笑んだ後、セリオが先行していき、来栖川老人は少しの間を置いて、セリオに続く。

そして、セリオがドアの近くまで来た時、セリオはおもむろにドアをノックした。もちろん内部の様子は赤外線センサーで分かっている上で、一人ずつ撃退するためだ。

(目標A、ドアに接近中…)

乾いた音が辺りに響いた後、部屋の中から男が一人ドアを開けて、顔を覗かせる。

「おい、何だ、ノックなんかしないで入ればいいだろうに？」

男が周囲を見回そうとした時に、セリオがすかさず男の身体をグイッと掴んで、ドアの外に引っ張り出す。

「おわ？ わわわわ…」

情けない声を上げながら、男はそのままセリオに投げ飛ばされた。

「ぐはあっ！」

不意に投げ飛ばされた男は、何がどうしたのかまるで分からずに、受け身を取ることもままならず、床に打ち付けられる。そこに、来栖川老人が止めの一撃を食らわし、男は気絶してしまった。

今投げ飛ばした男は、さっきまで運転手をしていた男だった。すると、残っているのもっとも憎らしい男だけである。

「あとは一人ね」

セリオはそうつぶやいて、そのまま部屋の中に入っていった。いささか無謀とも思えるが、高出力モードで動ける時間はそう長くない。多少の危険は承知の上で、短時間に決着

をつけねばならないのだ。

「あ、セリオ！ 一人で突っ込むのは無謀じゃぞ！」

部屋に入るセリオを見て、来栖川老人がそう叫んだが、それがセリオに届いたのかどうかは分からない。どのみち、こうなってしまうては来栖川老人も部屋に入るしかないと思いい、セリオが続いていった。

セリオと来栖川老人が部屋に入ると、そこにはあの男がソファに座っていた。二人を見ても特に動じる様子もないばかりか、セリオのセンサーがはずされてるのをみて、笑いながら言うのだった。

「ほお。自分でセンサーをはずせるとはお前、普通のモデルじゃないな。それに大の男をこともなげに投げ飛ばす辺りもさすがだな」

それに対して、セリオは衆人環視ねごかぶりモードに入ることなく、強い口調で返す。

「人の身体をキズモノにしておいて、へーぜんとしてる辺りは、他の連中とはちよつと違うようね。でも、わたしの相手じゃないわ」

「こりゃ、面白い。こんなタイプは初めて見るが、相手になるかどうかはやってみないと分からないだろう？ え、お人形さんよ」

わざと「お人形」の部分を強調した言い方をしながら、ゆつくりと立ち上がる。その片手には何かを持っていた。

「あいにくだけど、わたしはお人形じゃないわ」

とセリオも余裕でそれに答えるが、この時すでにセリオは活動限界にあった。時々通常モードに戻っているとは言え、高出力モードでの長時間の活動は内部に過大な負荷が掛か

るのだ。こうなったら一瞬で男を倒さないことには、状況打破は有り得ない。

いつものセリオなら、男が手にしていたものに対する注意を怠らずに、それへの対処もそれなりに講じておくところだが、今回ばかりはそれが気になったところで、明確な対策も何も用意できなかった。

とにかく男の懐に入り、すばやく一撃を食らわせるしかないと決め、それを行動に移すべく、セリオはすつと頭を落として、男へと突進していった。

「早いな！　だが…」

男の声が途切れる。

セリオが男に接近して、そのまま男を突き飛ばそうとする。

だが、男はみずから後ろへ倒れるようにしながら、セリオの直撃を避けようと試みる。いや、正確には倒れながら、最接近したセリオの身体に手に持っていたものを突き刺すような動きをしたのだ。ロボットの動きの特徴によほど熟知していなければ出来る芸当ではない。

「男はそのまま後ろに倒れるような形になり、セリオもそれを見て、すぐに第二撃の蹴りを浴びせようとしたが、突然セリオの動きが止まった。

「ぎゃうっ…」

小さく叫び声を上げ、その場に崩れ落ちてしまったセリオを見て、男が起き上がりながら、満足げな笑みを浮かべる。

「どうだい？　お前みたいない聞きわけのない人形の動きを止める“麻醉針”の効き目は」

「セリオ！」

来栖川老人が叫んでも、セリオの反応はない。

「この“麻酔針”はな、こいつらの制御回路に特定のショックを与えて、動作不能にしちまうんだ。俺が作ったんだ」

男は誇らしげに手に持っていたものを来栖川老人に見せた。それは柄だけになったアイスピックのような印象の代物で、男は笑いながら自分の内ポケットからそれをもう一つ出して見せる。

「ほら。もう一つあるんだ。これをこいつの電子頭脳にぶち込んだら、こいつは完全に沈黙する」

「な、何じゃと！」

セリオの方に駆け寄ろうとした来栖川老人に対して、男は牽制するような身振りをする。「確かにクルスガワのロボットは高性能だよ。でも、ある特定の信号に弱いんだよ。それで、俺はそれを見つけて、こうして平和利用すると言うわけだ」

「一体何が目的なんじゃ、お前は」

「クルスガワのロボットなんて、なくなっちまえばいい。俺はこいつらが大嫌いなんだっ」

男は吐き捨てるように言いながら、倒れてるセリオの頭を踏みつけた。

「酷いことをするもんじゃな」

「酷い？ こいつらは機械だ、作り物だ。人間サマに作られて、人間サマに仕えるためだけの存在なんだ」

「違うぞ、セリオにも…ロボットにも心はある」

「はん、あんたがそんなことを言うとはね！ こいつらに心があつたとしてもそれは所詮作り物で、それっぽく見せてるに過ぎないのさ」

「馬鹿者！」

「二セモノの心なんて、なくていい…そうだろ？」

男がそう言って、冷たく笑った時だった。突然、男の足を何かが掴んだと思うと、セリオがゆっくりと喋り出した。

「…：じょーだんじゃないわ」

「な、なにい？」

足首を掴まれた男は狼狽しながらも、何とか体勢を直そうとするが、セリオは離そうとしない。しかも、そのまま立ち上がりながら、男に向かって言う。

「何が作り物よ…。いいえ、確かにわたしの心は作り物ね。この身体だって人間とは違うわ。でも、ね…」

「な、何だ、コイツ…まだ動けるのか？」

男はどうにかして、セリオにもう一回“麻醉針”を打ち込もうと手を動かすが、セリオが立ち上がった上に足首を掴まれている状態で、うまく動くことが出来ない。

「一つだけ言いたいことがあるの」

そう言うと、セリオはすばやく男の手を強烈に叩き、その手から“麻醉針”を落とさせ、続けて男のむなぐらを両手で掴み、そのまま男を持ち上げた。

「な、何だ！ は、離せ！」

「わたしの感じたこと思ったことは、決して作り物じゃなくて、すべてが本物なのよ。今、

あなたをこうして吊し上げてることもね」

男は必死にセリオの手を解こうとするが、それも叶わない。

「ぐっ……………は、はなっ……………」

柔道の締め技に近い形で、男の身体が宙に浮いているが、セリオは表情を何も変えずになおも締めるだけだ。

「苦しいでしょ？ 辛いでしょ？ ロボットだって、そう感じることはあるのよ。それでも、その感情は作り物じゃないのよ」

男の足がもがくように大きく振られ、セリオの身体に当たるが、それでもセリオは手を緩めはしなかった。

「うっ……………」

「セリオ！ もう止めるんじゃない！ 本当に死ぬぞ」

見兼ねた来栖川老人がセリオの肩に手を置くと、セリオはようやく男を解放した。しかし、男の方は失神寸前の状態で、解放されてもその場に倒れ込むだけだった。

そんな男の様子を見て、来栖川老人が苦笑気味にセリオに向かって、

「ちょっとやりすぎじゃないか？ まあ、半分以上はこの男が悪いんじゃないが」

と言った。すると、セリオは表情も変えずに、

「止めてくれたことには感謝してるわ。でも、本当に頭にきちゃったのよ」

と答え、その後に笑いながらこう続けた。

「マジグレしちゃったって感じかしらね〜」

それに答えて、来栖川老人も笑いながら言う。

「恐い限りじゃなー。ところで、よく無事だったな」

「ええ。確かにあれが刺さった時には、ショックを食らったけど、刺さったところが制御回路のある場所じゃないから」

「なるほど。そりゃ確かに構造が若干違うからな」

「そーゆーこと。それじゃ先に行きましよ」

と、余裕の笑顔を見せるセリオだったが、この時に食らったダメージは致命的なレベルだったのだ。確かに、制御回路こそは損傷しなかったが、冷却器が完全に停止してしまったのである。

来栖川老人がセリオの異変に気づいたのは、部屋を出て少し進んでからだだった。セリオの服に何かのシミがあることに気づいたのである。よく見ると、先ほど“麻酔針”の刺さった辺りから、何かの液体が滲み出ているらしい。

「セリオ、このシミは何じゃ？」

来栖川老人が聞くと、セリオは平然としたままで、

「それって、冷却液だから触っちゃ駄目よ」

と答えた。

「そうかそうか。それならば触らないようにしておこう…じゃない！」

セリオがあまりにも平然と受け応えをしたので、来栖川老人もさらっと受け流してしまいうそうになった。だが、冷却液が漏れてると言うことは、冷却そのものが正常に行われていないと言うことに他ならない。

「あら？ おじい様、どーかして？」

「あらも何もあるか！ そんな状態では、お前さんがまともに動けるはずがないじゃろうに！ いいから、今すぐ待機モードに入れ！」

激しい口調で言う来栖川老人に対して、セリオは屈託のない調子で返す。

「駄目よ。こんなところで止まっても、何もならないもの。それに、浩之さんとの約束を守らなくちゃいけないもの」

「頼む、セリオ！ このままではお前さんが動けなくなるばかりか……」

声を詰まらせてしまった来栖川老人に、セリオが冷静に続ける。

「熱暴走で各部の挙動や制御が効かなくなつて、メモリや動力制御の焼損、やがては沈黙ね」

「分かつてるなら、何故言うことを聞いてくれんのじゃ？」

「おじい様、わたしはね浩之さんとの約束だけは破りたくないの。それに、おじい様を安全なところに送らないとね」

相変わらず自分の身を案じてくれるセリオに対して、もはや泣く寸前の表情を見せる来栖川老人。

「セリオ…もう十分じゃよ、わしはもう十分じゃ…」

その時、不意に廊下に人の気配とともに、声が響いた。

「珍しいですね、あなたもそんな表情をするなんてことがあるんですね」

「！」

驚いたように来栖川老人が声の方を向くと、そこには一人の男が立っていた。

「お久しぶりです」

「…やっぱりお前だったか、今回の一件の黒幕は」

「黒幕だなんて無粋な言い方はやめてくれませんか？　ちょっと暇つぶしにと思ったんで

すけど、僕の方はもう手駒がなくなりましたから」

丁寧ながらもどこか人を食ったような印象の喋り方。線が細い印象もあるがその分冷たい感じのする男だった。

「相変わらずのようだが、暇つぶしも犯罪まがいのこととなると、わしも目をつぶるわけにはいかん」

「でも、身内の犯行と言うのは、刑事事件としては成立しにくいですよ」

「単なる親子喧嘩と言うわけか」

「そうですよ、義父さん」

来栖川老人を義父さんと呼ぶこの人物、年はまだ二十代なのだが、紛れもなく息子である。しかし、老人のことを「父さん」とは表現せずに「義父さん」と言う。

「だったら、もうわしらを解放して、すぐHM研究所に連絡を取れ」

「イヤです…と言ったら？」

「何じやと？」

「そうそう。その表情いいですね、義父さん。それにそこにいるのは、義父さんが肩入れしてるHMX13S型でしょう？」

「知ってたのか」

「ええ。あの連中には言ってもありませんでしたが、僕も非常に興味があるんですよ。どうして義父さんが肩入れしてるのかね。だから、そのうちそっちも手に入れるつもりだったのが、

手間を省けていいですよ。少々傷んでるようで、それだけが残念ですけどね」

男はそれだけ言って、冷たく笑う。

「この馬鹿者が…」

来栖川老人が絞り出すようにつぶやくと、それに続いてセリオも呆れたようにつぶやいた。

「…大した息子さんね」

「妾腹でな。まさに不肖の息子じゃよ」

男に対する口調からがらりと変えて、来栖川老人がセリオに答えると、男はそれに対して続けるのだった。

「そうですね。義兄さんは大層出来がよくて、義父とっさんの誇りでしたけどね」

「とにかくわしは急ぐんじや。そこを通せ」

「イヤです。ここまであなたを追いつめられるとは非常に気分がいいんですよ」

一向に取りつく島もないばかりか、人を困らせて楽しんでような男の態度を見せつけられて、ふとセリオが低くつぶやいた。

「……何かムカつくわね」

そして、ゆっくりと男の方に歩き出す。

「お、おい、セリオ？」

突然のセリオの行動に来栖川老人は声で制止したが、それでもセリオは止まらずに、そのまま男の正面に近づいた。そして、やがて歩みを止めて、手を腰に当てて、言い放った。

「ちょっとそこの馬鹿息子！」

それまで一向に動じる様を見せなかった男が苦笑を浮かべて、

「おや？ まだ動けるんですか。それにしても、馬鹿息子はないでしょう？」

と反論すると、セリオはなおも言い放つ。

「あんたみたいなのは馬鹿息子で十分なのよ」

「おやおや、これが義父さんのお気に入りですか？」

セリオの物言いに腹を立てる様子を見せることはないが、男は呆れたように両手をあげて驚く仕種をわざとしてみせる。

だが、そんなことにも一切構わずにセリオは、

「ウダウダ言っでないで…」

と言いながら、男にさらに近寄っていく。

そして、男がまだ両手を上げて驚く仕種をしてるところに、右腕を大きく振り上げて、

「ん？」

「どきなさーい！」

叱咤とともに渾身のピンタ。

“バチーンツ”

凄まじい音と、その勢いで横に転げる男。ちなみに、セリオが右腕を使ったのは、利き腕だからと言うよりも、右腕の方が左腕よりも頑丈だからである。

「うあああああつ！」

ゴロゴロと盛大に転げて行った男に、さらにセリオがたんかを切る。

「このセリオおねーさんをなめるんじゃないわよ！」

「うっ……」

男は低くうめき声を上げたが、セリオはそれを完全に無視して、

「さ、行くわよ、おじい様」

と来栖川老人に声を掛けた。しかし、来栖川老人の方はと言うと、そんなセリオの迫力に圧倒されてしまい、

「…あ、ああ」

と生返事をするだけだった。

こうして馬鹿息子を振り切って、ようやく来栖川老人の屋敷が見えた時、セリオは笑いながら言うのだった。

「ここまで来れば、おじい様ももう安心ね。それじゃわたしは浩之さんのところに急いで帰るから」

「お、おい！」

「それじゃーね」

「お前さん、すでに限界を超えてるんじゃないに！」

そんな来栖川老人の声が届いているのかいないのか、セリオは一度だけ振り向いて、

「浩之さんが待ってるから」

とだけ答えて、それ以後振り向くことなく、夜の道を走り出した。

14 うそつき

山本を送り出してからずっと、浩之は電話機のそばにいた。そこに椅子を置いてじっと電話か誰かが帰ってくるのを待っていたのだ。

「来ませんね…」

浩之に頼まれてコーヒーを持ってきたマルチが、小さなお盆を差し出しながら、浩之に向かつてつぶやいた。

お盆の上のマグカップを取りながら、そして電話と玄関のドアの両方を見ながら、浩之も短く答える。

「ああ…」

熱いコーヒーで身体を暖めながら、浩之はなおも待ち続けるつもりだった。

山本にしても、セリオにしても、約束を破ることはない。そう信じていた。

「今日は俺、ずっとここで待ってるからさ、マルチは休んでいいぜ」

「いえ、わたしも待ちます」

「でも、マルチは充電しないといけないんだろ？」

「まだ大丈夫ですから…」

「そうか…。それじゃ、無理しないでいいけど、一緒に待ってようぜ、セリオと山本さんをさ」

「はいっ」

その後もマルチと浩之はその場から離れずにいた。そして、時折時計に目をやる浩之だったが、待つ身にとっては一秒が一分にも一時間にも感じられる。

「まだ何もなしか…」

とため息混じりにつぶやいた時、不意に電話のベルが鳴り響いた。

「！」

その音に浩之もマルチも一瞬固まったようになったが、すぐに浩之が受話器を取った。

「はい、藤田ですっ」

『…浩之さん？』

「セリオ！ 無事だったのか！」

『約束……』

「約束？ ああ、帰るってやつだな？」

『ごめんなさい…それ、守れそうにないわ』

「え？ おい、それどーゆーことだよ！」

『それじゃ…さよなら』

「さよならって何だよ？」

しかし、それ以後浩之がいくら受話器に向かって喋っても、返事はなかった。

それでも浩之は受話器を持ったまま、喋り続けていた。

「おい、さんざん待たせた挙げ句、さよならって何だよ！ 約束破るってのかよ、セリ

オ！ コラ！ ちゃんと説明してみろってんだよ！」

「浩之さん…」

傍らにいたマルチがそっと浩之に寄り添って、心配そうな表情で浩之を見つめると、浩之もふっと語調を和らげた。

「…一体なんだってんだよ……セリオお」

「おねーさん……帰って来ないんですか？」

マルチの問いに何も答えずに、ただ浩之は手をマルチの頭に置いた。

「あ…」

そして、突然髪の毛をくしゃくしゃにするように手を動かした。

「ああ、浩之さん、髪の毛がくしゃくしゃになっちゃいます…」

たまらずにマルチがそう言っても、浩之はその手の動きを止めることはなくただ乱暴にマルチの髪の毛をかき回す。

そして、不意にひとことだけ。

「セリオのうそつきめ……」

15. おねーさん

あの事件から一ヶ月が過ぎようとしていた。

来栖川の方からは特に何もアナウンスもなく、総帥の誘拐未遂事件が報道されることもなかった。

浩之の生活も平穩に戻っていた。

大学と家との往復だが、家に帰ればマルチが迎えてくれるし、寂しさを感じることも特にはない。

セリオの設備も、あの事件から数日後にHM研究所の人間がすべて撤去してしまったので、今は何も残っていない。

まるでセリオは最初からいなかったように、何事もセリオが来る前と一緒のようだった。だが、それは表面上のことだけに過ぎない。

浩之やマルチにとっては、「セリオのいない」日常なのだ。決して、セリオが来る前に戻ることはない。

のんびりとした日曜の午後。

浩之はマルチの入れてくれたコーヒーを飲みながら、ビデオ鑑賞にふけていた。しかし、別に見たくて見ると言うものでもなく、ただすることがないから見ただけである。

「…浩之さん、見てるんですか？」

マルチが尋ねる。

「マルチこそ、見てるのか？」

「え…わたしはこの映画苦手ですから…」

「そうだったか……」

どこか気の抜けた会話が続いた後、

“ピンポーン”

玄関の呼び出しチャイムが一度だけ、来客を告げた。

「あ、お客様みたいですわね」

すぐそれに反応して、マルチが立って出ようとするのを、浩之は腕をつかんで止める。

「いいよ、こんな日に来るのはドーせろくでもない新興宗教の勧誘か、訪問販売の類だろうからな」

「え…でも、出てみないと…」

戸惑いをあらわにするマルチの腕をつかんだまま、浩之が続ける。

「ほっとけばいいさ。別にセリオが来るわけじゃないしき…」

何気なく浩之が口にしたその名前は、やはりマルチにとっても消えることはない大事な名前だった。

「…そうですね…」

と言つて、浩之の言葉に従うべくマルチがまた腰をおろすと、

「…誰も出なきゃそのうち諦めて帰るさ」

と浩之は答え、また気の抜けた状態に戻ろうとした時。

“ピポピポピポピポピポピポピンポーン”

呼び出しチャイムがけたたましく鳴り出した。

「げっ！ 一体何だよ。立て続けに押ししてるから、“ピンポーン”の“ピン”の部分が重なってるしよお…って、待てよ？」

「あの…そんな擬音語の説明してる場合なんですか…って、あれ？」

「これって前にもあったような気がするんだけどな？」

「はい、わたしもですー」

二人はお互いの顔を見合わせていたが、突然ある感情に突き動かされるようにして、玄関へと走り出した。

“ピポピポピポピポピポピンポーン”

相変わらずチャイムは鳴り続けているが、それは二人の期待を一層膨らませる効果を持っていた。

もしかしたら！

もしかしたら、この玄関のドアの向こうに！

大きな期待を抱きながら、浩之が玄関のドアを開けると、そこには…

「いるのは分かってたんだから、早く出てちよーだいよね」

と口を尖らせた一人の女の子の姿があった。

間違いない。

その声も、姿も、間違いない、セリオだった。

「セリオおおお！」

「おねーさんっ！」

浩之は裸足のまま飛び出して行って、セリオを抱き締めた。出遅れたマルチは、その周りで泣きながらセリオに寄り添おうとする。

そんな二人をなだめながら、セリオは明るく笑いながら言う。

「これからもよろしくねっ」

こうして、藤田家は再び賑やかな騒動を繰り返すことになった。それは確かに平穏ではないだろう。安寧と言う言葉は藤田家から、消え去ってしまったろう。だが、それでもいいのだ。何故なら、これからは「セリオおねーさん」が消えることはないのだから。

(了)

『新・おねーさんの耳はロボの耳』

予告編

おねーさんは新型

セリオとの再会を果たした浩之は、喜びのあまりセリオに会うなり抱き付いて、しばらくそのままだったが、ふと怪訝そうな表情を見せた。

「…何だか抱きごこちが前と微妙に違うような…。特に胸の辺りの感触が違うような気がするんだけどな…」

すると、それまでされるままにしていたセリオが答えてくれる。

「あら、よく分かったわね、さすが浩之さん！」

「いやいや、さすがと言われて喜んでいいやら悪いやら…」

と浩之は照れた様子を見せるが、そもそも胸や抱きごこちの微妙な違いなどに気づくのは浩之ぐらいなものである。

「それで、やっぱり違ってるのか？」

改めて浩之が尋ねると、セリオがそれに答えるべく、

「実はね…」

と言い始めた途端、そこに男の声が重なった。

「新型なんですよ」

「あれ？」

その声に気がついて、セリオの周りをよく見ると、山本の姿があった。さらにはどこか

の老人の姿も。

「山本さん、いつからいたんですか？」

「藤田さんがセリオを抱き締める前からずっといましたよ」

「いやあ、全然気が付かなかったですね。山本さんって影薄いなあ〜」

「あなたがセリオ以外を見ていなかったただけでしょーに！」

「まったく、大した若者じゃな」

「あれ？ このじいさんは？」

「来栖川会長ですよ。総帥と言ってもいいですけど」

「へー、あなたがセリオを壊した元凶か」

「藤田さんっ、物には言い方てのが…」

「まあ、確かにその通りじゃから、構わんよ」

「で、そいつが何で？」

「だから、セリオを返しに来たんじゃないか」

「そうです。それに新型として、しかもそれは藤田さんが正規ユーザーと言うつまり完全に市販モデル同様の扱いでね」

「え？ どーゆーことなんです？」

「それでは説明しましょう！ このセリオは、HM17型と言う正式なモデルなんです」

「ふむふむ」

「なお、HM17型はこの“Collor”一体のみです。ですが、予備筐体はちゃんとこちらで用意してありますし、消耗品については今後の新型と共用できるものがありますので、メ

ンテナンスについてはご心配なく」

「へー」

「それから、この前の事件で得た教訓をすべて生かしてあります」

「と言うと？」

「まずは耳飾りは完全にダミー化されて、センサーはすべて内蔵されました。それと、冷却器の二重化及び効率改善によって、高出力モードでの長時間運転が可能になり、通常使用における熱暴走もしくくなりました」

「へー、そりゃスゴイ」

「おまけに動力部のストレスなどを解消した結果、以前のセリオよりもパワースピード、反射速度が向上しています」

「へえ…それは、ちょっとフクザツだな」

「それと！」

「ん？」

「このモデルの最大の特徴はっ！」

「はい？」

「髪の毛の色が自由に設定できること！ それと、瞳の色も変えられます！」

「おおおおおおおおっ！」

「どうです？ 感激していただけましたか？」

「うんうん！ 十分ですよ、山本さん」

「それでは早速その特徴をお見せしましょう。セリオ、黒髪にしてみましたか？」

「山本さんはやっぱりそれがいいのね？」

「ははは、まあいいじゃないか」

「はいはい、それじゃ……」

「おおおおおおおおおおおおお！ 何だかしらねーけど、すごいいい感じじゃん！」

「そお？」

「うんうん！ そうだ、セリオ、今度はパツキンやってくれよ！」

「しょーがないわねえ」

「おおおおおおおおお！」

と、この後、浩之はセリオの髪の色のパリエーションを楽しむばかりで、話は一向に進まなくなるので、もつとちゃんとした展開は、新シリーズの、

『新・おねーさんの耳はロボの耳』の本編にて……。

(続く)

『おねーさんの耳はロボの耳』完結編第五話

『おねーさんの耳はロボの耳』完結編第五話

初版:1997/11/13

第二版 (PDF化) :1998/07/28

(PDF書式変更) :1999/11/08

PDF書式変更:2016/05/09